



国有林野
事業の取組

関東森林管理局

あかや 赤谷プロジェクト 生物多様性復元を目指す 協働・連携の取組



▲ホンドテンの痕跡調査

▼ブナ等の種子の豊凶調査



生物多様性の復元と持 続的な地域づくり

群馬県北部のみなかみ町に位置し、新潟県との県境に広がる約1万ヘクタールの国有林野を対象に、平成16(2004)年3月から三国山地／赤谷川・生物多様性復元計画(通称：赤谷プロジェクト)が始まりました。

「赤谷」は、スギやヒノキな

どの人工林面積が約3割を占めている一方、標高800メートルを超える所にはブナやミズナラ、沢沿いにはクヌギ、里山周辺には薪炭林として利用されていたコナラなど多種多様な広葉樹が生育しています。また、これらの森林には、希少種であるイヌワシやクマタカが生息しているほか、ツキノワグマなど本州に生息する代表的なほ乳類の多く

が生息しており、現時点までに、48種のはほ乳類の生息が確認されています。この他にも、貴重な両生類や植物などが生育・生育していることから、赤谷プロジェクトでは、多様な生物相の維持に必要な様々なタイプの森林を配置することと、自然を保全しながら大切な森林資源の持続的な活用による地域づくりを進めることを目指しています。

「協働・連携」したプロジェクト運営

赤谷プロジェクトは、地元みなかみ町新治地区の皆さんを中心とした赤谷プロジェクト地域協議会、全国で自然保護活動に取り組んでいる(財)日本自然保護協会及び関東森林管理局の三者で「企画運営会議」を設置し、合意形成を図り



ながら運営されています。

また、赤谷プロジェクトの取組に対して、科学的立場から検証・助言する「自然環境モニタリング会議」及びその下に「ワーキング・グループ」を設置し、年度当初に定めた事業計画に基づき植生、猛禽類、溪流環境などの各種調査・取組を実施しています。このように、関係者が協働・連携しながらプロジェクトを運営することで、「生物多様性の復元と持続的な地域づくり」の目標達成を目指しています。

このプロジェクトにはボランティアもサポーターとして調査・取組に参加しています。毎月第一土曜・日曜を「赤谷の日」と名付け、ホンドテンの生息状況のモニタリングや木の実の豊凶調査などを行っており、群馬県内や近県のほか、遠くは福島県からも参加しています。

6年間の成果と課題

赤谷プロジェクトが開始してから6年間の主な取組を紹介いたします。

① これまでの調査結果から、

潜在自然植生赤谷の本来あるべき自然植生を「ブナ・ミズナラ林」、「クリ・コナラ林」及び「溪畔林」に大別することにし、これらを将来の森林の姿と位置づけています。

当面、人工林を将来の姿に誘導するため、母樹(種子の供給源となる広葉樹)からの距離を考慮した間伐の方法などを調査・検討していくことが必要です。

② 多様な動物が生息できる森林環境づくりを目指して、イヌワシ、クマタカなどを個別にモニタリングしてきた結果、生息数や食性などについて多くの知見を集積できました。

今後は、人工林内での猛禽類の採餌形態など、狩場環境の創出にも資するよう人工林管理に向けた情報の蓄積・解析が必要です。

③ 国土の保全・防災と溪流生態系の保全との両立を目指して、平成21年度に治山ダムの中央部を撤去しました。

今後は、撤去後の土砂の堆積や流出の状況、魚類等の移動状況をモニタリングし、その効果について科学的な検証を進めていくことが必要です。

赤谷の森基本構想

赤谷では、潜在自然植生を中心とした森林を将来の姿としており、現存する良好な天然林を保全しつつ、人工林は天然林に誘導するとともに、木材生産に適している場所では、生物多様性保全に配慮しつつ、木材生産機能を維持してきました。6年間の成果と課題及び今後の管理の考え方を「赤谷の森基本構想」として平成22年3月に取りまとめました。

関東森林管理局では、平成

22年度赤谷の森を含む利根上流森林計画区の地域管理経営計画等の策定作業を行うことから、関係者の合意を得ながら、この基本構想を計画に反映させていく考えです。赤谷プロジェクトは、息の長い取組であり、科学的な知見の集積が十分でない要素も少なくありません。しかしながら、将来の森林の姿をしっかりと見据えた上で、モニタリングと評価・検証を行い、その結果を踏まえて取組を見直しながら一歩一歩着実に進めていきたいと考えています。



◀ 工事前



▶ 完成

国土の保全・防災と溪流生態系の保全との両立を目指した取組